郷 土 こ ぼ れ 話

地域の神様　昔話「笠 地 蔵」

昔々あるところに、貧しくも心の優しいおじいさんとおばあさんの夫婦が住んでいました。ある年の暮れのことです。このままではお正月のお餅も買えないということで、みの笠を作って町で売ることにしました。

おじいさんは大晦日の町で一日「かさいらんかえ」と売って回りましたが、不景気のせいか一つも売れませんでした。帰り道、ちらちらと雪が降り始めます。峠に差しかかったときにはすっかり吹雪になりました。ふと見ると、峠の道端にお地蔵さんが六つ並んでいました。

「ひゃあ、こんな吹雪の中、笠もなくてはさぞお寒かろう。さあ、この笠で少しでも雪をしのいでくだせぇ」

優しいおじいさんはそう言って、お地蔵さんに笠をかぶせてあげました。お地蔵さんは６つ、笠は５つしかなかったので、足りないぶんは自分の手拭いをまいてあげました。

結局この日、笠は売れませんでしたが、何かとてもいい気分になっておじいさんは家に帰ってきました。帰宅してから、お地蔵さまのことをおばあさんに話すと､それは良いことをしたと言い、喜んでくれました。そして、おじいさんとおばあさんは、いい気分で床につきました。

さぁ、お正月の朝になりました。昨夜のうちに雪はやみ、まぶしい太陽の光が雪をてらし、キラキラと窓から差し込んできました。

なんだか表がにぎやかです。楽しい歌と、大勢でワイワイいってる感じです。おばあさんとおじいさんが外へ出ますと、家の前にお正月のお餅や、飾り物、ご馳走やお菓子が山のように積まれていました。

「ひゃー、これはどうしたことじゃ」

先を見ると、道を引き返していく六人のお地蔵さんの姿が見えました。お地蔵さんたちは振り返ってにこやかに手をふります。

「お地蔵さんたちが昨日のお礼をしてくれたのか」

「おじいさん、これでよい正月が過ごせますね」

おじいさんとおばあさんは、立ち去っていくお地蔵さんの姿を見て、手を合わせました。

おしまい

引用：読む・聞く　昔話　「笠地蔵」